心理学シリーズ　S.フロイト編　＜その 2＞

2005.07.10　タツノオトシゴ

会員のみなさま、月も変わり　いよいよ本格的な梅雨らしくなってきました。先月は久しぶりにプチ海外旅行？（何しろ橋を渡って行ける身近な島です）に行って来ました。今までのシリーズでは、自転車で家から 10 分以内で行ける身近な風景を見てきましたが、今回は島巡りです。ちょっと雰囲気が違いますね(^^)　という訳で、大阪から「暑中お見舞い申し上げます！」

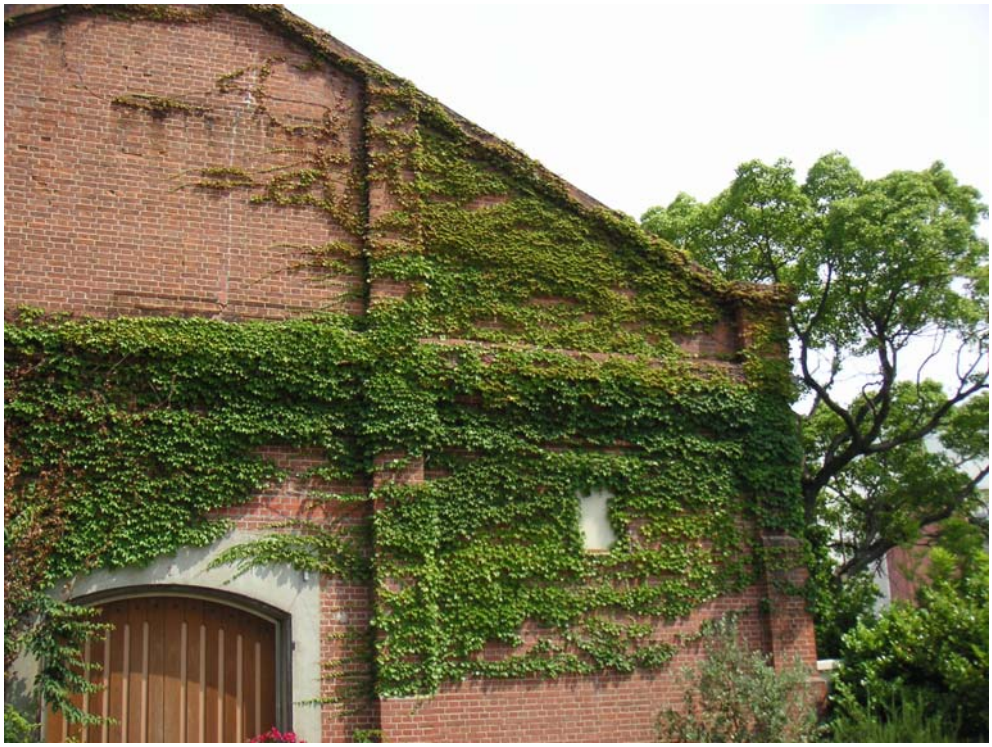
その島では水仙が咲き乱れ、場違いな風力発電の風車が廻っています。環境に優しい風力発電は、イメージとは違い自然との調和がアンバランスでした。世の中には、思い込みとか錯覚による事象が多数存在するのですね！島の南地区は道路も細く、分かりにくいコースで、標識を見失うととんでもない所に出てしまいます。展望台という標識に沿って山道を登っていくと、小高い山頂から太平洋が望めます。途中にレンガで造ったトーチカ風の遺跡を見つけ、これは何だと思いながら進んでいくと、山頂には写真に有るような不思議なものが置いてあります。解説によると、江戸時代に作られた砲台の跡だという事でした。砲身は途中から折れていますが、口径は 38 センチありました。

フロイト的には、砲身は男性の象徴？中を覗くと螺旋状に溝が切ってあり線状痕の出来る過程が理解できます。砲弾は何キロ先まで届くのかは分かりませんが、狭い海峡を通る外国の船にとっては脅威なのでしょうね・・・当時の日本では、瀬戸内海の内側に不法侵入されたら、大阪や京都は大打撃を受けるのです。当時の砲弾は、日露戦争時に実際使用されたという記録も残されていました。ここまで来ると皆さんもどこの島かは予測できますよね（^^）そうです！オノコロ島のことです！（別名：淡路島ともいう）そこは、日本の国が最初に出来上がった所だとも云われています。歴史に興味のある方は『古事記』や『日本書紀』を読んでみてください。

人間はみな、自分がどこから来たのかを知りたいと思っています。国家が民族の神話や歴史について何らかの根拠を欲するのとも似ています。普通は「両親から生まれた」という物語を持っている子供も、「お前は橋の下で拾われた」などと言われると、平凡な家庭の子供は、「自分はもっと身分の高い人の子供に違いない！」などと妄想を描きます。こうした物語を精神分析では「家族小説」（ファミリー・ロマンス）とか「出生妄想」などと呼んでいます。民族における「国家神話」や「建国神話」なども同様の傾向があり、長い歴史を持つ小国はその傾向が強いようです。（でも国の場合は、都合の悪い部分は削除される傾向が強く出てきます）以前にも取り上げていますが、個人の記憶でも都合の悪い部分は少しずつ消去されているようです。「意識の世界」から「無意識の世界」に押し込まれている『記憶』の部分があるのでしょう。『妄想』とは、自分に都合の良い部分だけを強調して思い込み、辺りを顧みずに行動する事なのでしょう。

ところで皆さんは『錯覚』と『幻覚』の違いは何か知っていますか？？？？
分かりやすい例ですが、『錯覚』とは実態とは違ったように見えていたり、自分の意識で勝手に違う解釈をしている事（視覚による見え方の違いや、記憶の間違いなど）があります。「先ほどまで、ここに〇〇さんが居たよね？」（これは錯覚でしょう）しかし、「先ほどまで、ここに〇〇さんが居たに違いない！」となると、これは『妄想』ですし「ほら、そこに〇〇さんが座っている！」（実際は誰にも見えない）となると『幻覚』の世界です。
（怖いですね～ぇ！恐ろしいですね～ぇ！）

フロイトは「無意識の発見者」と呼ばれていますが、人間が自分の心の中で気付いていない部分があるということは、古代から知られていました。「無意識のうちに」何かをやってしまうことがあるという体験です。『心の病』がその「無意識」に中にあると考えたフロイトは、実験や観察を通じて理論を組み立て、その理論によって得られた臨床的な治療をもとに、精神分析という学問を確立していったのです。古代人は、『心の病』とは、誰かに呪われたり、



掟を破ったために神の祟りを受けたりして、その人の魂が外にさまよい出て迷子になっていると考えていました。ですからその治療には、神の怒りを静めるお供えをしたり、呪いを祓ったりする呪術師（呪術医）が治療にあたっています。次に中世に入ると、ヨーロッパではキリスト教の考えが世界を支配しており、心の病は『悪魔の仕業』だと考えられるようになりました。したがって治療者は祓魔師（エクソシスト）の聖職者による悪魔祓いが一般に行われています。イギリス軍の処刑（火刑）を受けた“ジャンヌ・ダルク”は魔女狩りの犠牲の一例です。（1931 年 5 月 30 日が処刑日：詳細は『ジャンヌ・ダルク処刑訴訟記録』として残されています。）
その後 1910 年、カトリック教会は彼女の厚い信仰心を認め聖者として認めています。18 世紀末には自然科学が発達し、人間の心を動かしているものは「磁気」や「電気」ではないだろうか？という考えが起こります。心の治療に磁気や電気が使われ、さらに催眠術までが登場してきます。オーストリアの精神医：J. ブロイアーの患者であった『アンナ･O（仮称）』の催眠術治療を通して、フロイトはいろいろな事を学びます。その意味では精神分析の“生みの親”の一人に彼女も加えられるのでしょう。

催眠療法の効果を目の当たりにしたフロイトは、次に前額法（患者の額に手のひらを当てる）や自由連想法（患者には触れず、横になっている患者に自由に語らせる）へと治療法を変えていきます。この自由連想法でフロイトは心の中に潜む「抵抗」に出会います。（無意識の中から出てくるものを、押さえつけようとしている何かが存在する）医者として一方的に聞くのではなく、患者が自由に連想し語るためには「分析家と患者の関係」において『心の交流』がなければ進展しません。薬や外科的な処置をせず、ただ患者の状況から答えを見つけ出すには、唯一『言葉』が治療道具になります。アンナの場合にも、「紐のようなものを見ると蛇に見える」という『幻覚』が生じたり、「コップから水を飲む」というごく普通のことが出来ないという症状が、無意識の世界から意識化されることで解消しています。分析家と患者の関係では『主体は患者』という原則が守られていま

す。現在の精神分析療法では、実際にどんな風になっているのかを見てみましょう。一般的には治療の契約を結び、一回に１時間程度の治療を行います。多い場合には週に２～３回の治療ですが、週一回くらいの場合もあります。分析家と患者の間で「合意した内容で開始され、合意の上で終了する」というのが基本です。中には連絡もなく急に来なくなったり、予定外の時間に押しかけてきたりで大変なようです。自由連想法では、分析家は患者からは直接見えない場所で話を聞くようです。治療中に起きる現象に「転移」とか「逆転移」という現象があります。たとえば、被分析者が若い女性で、分析者が父親くらいの男性の場合『父親に対する好ましい感情』を抱くことで治療がよい方向に進展するケースが考えられます。「逆転移」の場合、本来感情を表面に出さない治療者が、相手（患者）に対して好意や嫌悪の気持ちを抱く場合が考えられます。これは、治療の妨げになるので避けなければなりません。（これってなかなか難しい事だと思います。お客さん：被治療者が若くてきれいな女性に対して、特別な感情を持たず、冷静でいれるというのは、余程日常の訓練が必要でしょう）あまり専門的な事は分かりませんが、私が分析家の立場だったら「ストレス」を感じてしまいます。現在講義を受けている臨床心理の先生は、いつも受身の立場で話を聞くケースが多く、ストレスの発散にお酒の力を借りているようです（大酒飲みです）

S.フロイトの業績の中で、前回ちょっと触れた『防衛機制』または『適応規制』という言葉を覚えていますか？娘の A.フロイトが体系化に携わっていますが、人間が自分の身（この場合は心）を守るために備わっている機能の一つと考えられています。感情のまま

に動かされ行動すると、自分自身が不安定になり崩れやすくなります。それを防止する為に働くのが『自我の防衛機制（メカニズム)』であるとされています。今回はその中から「抑圧」、「否認」、「分離」について紹介してみます。「抑圧」とは一番基本的なメカニズムで、自分が認めたくないものを“無意識”の中に閉じ込める働きです。「否認」もそれに近いのですが、現実を直視せず、認めないことです。（胸に手を当てて思い出して下さい。）この場合は意識の中にあるものを認めずに、否定することです。そして「分離」のケースの場合は、“いやなことや思い出したくないこと”を考えたり話すときに、まるで他人事のように振舞う行動です。感情を伴わず、淡々と話す・・・最近の少年犯罪を見ていると、このような傾向も理解できます。今回のタツノオトシゴは「分離」の傾向の中で書いています。やっぱりフロイトは難しい！！（相性が？）

次回は、残りの『防衛機制』や文化や芸術に関する部分をお話しする予定です。